

公益社団法人私立大学情報教育協会  
平成24年度第4回大学職員情報化研究講習会運営委員会 議事内容

- I. 日 時：平成25年3月11日(月) 午後3時から午後5時まで  
II. 場 所：アルカディア市ヶ谷(私学会館)  
III. 参加者：岡本担当理事、木村委員長、斉藤副委員長、廣野副委員長、志田委員、青山委員、小野委員、東川委員、久保田委員、土肥委員、川崎委員  
事務局：井端事務局長、森下主幹、野本(記)

IV. 検討事項

1. 全体を通して

- ・ 応用コースの結果について、実施に関して大きく変更し時間もなかったため、心配であったがまずまずであったとの意見があった。
- ・ 委員の構成を含めて厳しい状況はあるが、理事会で教員のみならず職員の力で進めて欲しいとの意見があった。
- ・ 来年度の事業計画については、職員から教員への情報提供などの働きかけが必要で、ポートフォリオやIRなど理解が必要になっている。また、学校法人会計の情報システムについて情報交流してはどうかの意見があった。
- ・ 職員が教員に働きかけることを講習会にふくめることはできないか。

2. 応用コースの成果について

- ・ 基調講演と分科会の連携、意見交換で意識が高まった。
- ・ 実践的な情報が欲しかった意見として、課題解決やトレンド把握が7割の評価に表れているか。実践に役立つ内容になっていたか。
- ・ 事後研修で第3分科会はアンケートをここでとっていたので、まとめをメーリングリストで行う取り組みができた。
- ・ 第1分科会では、3つの事例から参加者の教員がリードしている場、情報交換で改善までの議論が不足したと思われる、1日での時間的制約で狙いを定める必要がある。
- ・ 第2分科会では、教育支援で、日帰りなので特に事例紹介に重きを置いて意見交換とした。事例紹介ありきの企画によるのか教員の参加者が相互に刺激になった。
- ・ 事後研修での問いかけには反応が少なかった。情報提供で満足された結果を得られた。
- ・ 第3分科会は、2件の事例から3つのテーマで議論してもらったが、短い時間で期待の結果までは達成できなかったと思われる。1日の研修として満足した帰ったが交流としては不足と考える。アンケートを後にしたので事後研修は少しは進んだ。
- ・ 企画を練って先導する必要がある、方向付けをきっちりする必要がある。年齢によって情報収集を希望され、他大学の情報に強い期待があった。
- ・ 研修プログラムのさらなる工夫と運営の導きが必要で、参加者の意識をどう高めるか、情報提供で意味のある事例をどう選択するか、事後研修の設計など検討課題がある。
- ・ 情報提供として持ち帰ってもらう意味では評価はあったと考える。
- ・ グループ討議の議論では内容によって、委員が全てをリードできるのかの疑問があり、2日にするという時間的な問題だけではない。
- ・ 具体性を持った事例の提供ができるのか。
- ・ 若い世代をのばす研修にする必要性を感じる、委員が中に入って指導する立場で進め、参加者の特性を理解して働きかけを委員から高めていく必要がある。
- ・ 今回の結果については、スタイルを変えて事前の案内時間も少なかったが、委員の実績で100名集まったことは評価ができ、事例紹介での満足感はあったと思われる。

### 3. 来年度の計画について

- ・ 今年度の流れを踏襲する方向ではどうか。基礎は進め方の流れを変えたので、来年度も同じようなテーマ的なもので、不足点はあるが同じ形で実施してはどうか。
- ・ 基礎は見える化シートが分かりやすかったと思われる。応用については情報提供としては妥当ではないか、もう1回実施して結果から交流や議論不足の課題を検討してはどうか。
- ・ 基礎は若い世代をターゲットに昨年をベースに早めに準備をすること、基礎は私情協の研修として一般化されていると考える。応用はブラッシュアップして実施してみる。
- ・ 応用は情報収集のために話を機器にきた人が多いか？ただし、事例だけでは企業のユーザ会と同じで、失敗事例などから議論するようなことはできないか、どういう立ち直りや学んだ視点など、大学だからこその予算・人員・組織面など大学の内部的なものなど。
- ・ 事前の案内については、基礎は踏襲するとして、応用は材料や見出しを出さないと案内は難しいと考える。頭が書き部分で ICT の表現を工夫する必要あり、教育かいぜんに ICT が欠かせないと思わせる表現にする。
- ・ 基礎では事前アンケートなどの事前研修を検討できないか。
- ・ 大学として、こういう問題、組織的にがんばってることなど、高校生から見て動機づけができるような情報公表、呼びかけなど、有用な情報は大学の姿勢（内情的なもの）、学修時間の問題など、時間の把握、学修行動のモニタリングから、職員が客観的なモニタリング情報を出す必要がある。教学 IR として理解を醸成すること。
- ・ 教員への働きかけのためデータが必要で、そのためにモニタリングが必要で職員の役割になる。職員が牽引している事例などが基礎でも評価できるのではないか。

### V. 今後の対応

- ・ 来年度の委員構成に向けて、委員として幅広い部門から推薦できないか検討することにしていく。